は、後漢書鄧禹傳五丁に、父老童穉、垂髮戴白滿其車下、莫不感悅、注に、垂髮童幼也、戴白父老也云々、同書呂强傳廿七丁に、故太尉段熲、武勇冠世、習於邊事、垂髮服戎、功成皓首、注に、垂髮謂童子也云々、晉書陳敏傳九丁に、永長宿德情所素重、彥先垂髮、分著金石云々などこれかれ見ゆ、蘇軾詩には、半白不羞垂領髮、軟紅猶戀屬車塵とも作れり、和名抄老幼部に、髮漢書注云、髫髮謂童子垂髮也、和名宇奈爲、俗用垂髮二字云々、玉海、吾妻鏡、明月記などに、垂髮と見えたる、皆髮を垂たる童兒にいへり、夫木抄雜十七に、垂髮子の歌を擧げたるに、うなゐごが草刈笛云々、うなゐこが、ふりわけ髮云々、かくる草かづら云々、うちたれ髮云々、かぶろなるうなゐども云々、ならす麥笛云々などの詞あり、宗祇兒敎訓に、世中の、わるき若衆の、ふるまひを云々、滑稽詩文に、喝食若衆と見え、若氣勸進帳に、若氣小僧喝食若衆兒などあり、垂髮若衆、ウナキなどは同物異名にて總名也、喝食は僧になるべき兒のいまだ剃髮せざるほどをいふ、若氣は、今俗にもニヤケ者、ニヤケタ男などいひて、男色もはらの若衆にいへり、兒若衆同物ながら、若衆は總名、兒は法師の近習の小者にいへり、慈昭院殿家集足利義政公に、垂髮

常磐山とはにはさかずいはつゝじ春の日數をたづねてもとへ、此歌するゐはつをかくせしなり、ゐをいにせしは、後の歌なれば論ずるにおよばず、卯花園漫錄四の卷に、柱懸の垂撥の歌とし、其圖を出し、表は黑塗にて、裏に此歌を金粉の蒔繪にしたるものゝよしいへり、

洗髮

〔歷世女裝考三〕髮を洗ふをすますといふ古言

今物を洗ふをすますといふ女詞いと古し、うつぼ物語樓の上の卷下の上七月七日、いぬ宮御ぐしすまさせ玉ふとて、ろうの南なる山ゐのしりびきたるに、泉を引たる庭内の細き流れはまゆかしやうぎ丸の水のうへにたてゝ、ないしのかみ、もろともにおはす、それもすましを髮ためり、人もみえぬかたなれど、ほう玄やうひかせ玉へりとあり、さればすますといふ詞は、八九百年前よりありしをしるべし、七月七